在日ドイツ人学校生徒の言語使用

今村　圭介

１．はじめに

近年、日本に長期滞在する外国人は年々増加し、彼らは様々な形態のコミュニティを形成している。そのような少数言語コミュニティでは、日本語のみならず、彼らの母語も使用されるが、コミュニティによってその言語使用は多様である。これまで日本の少数言語コミュニティの言語使用に関する研究は主に、その滞在者数が多いコミュニティから行われてきている。生越（1983）、金（2003）は在日コリアンの言語使用に関して、ナカミズ（2003）は、ブラジル人の出稼ぎ労働者やその家族の言語使用に関してそれぞれ研究を行っている。また、Long (2007)では小笠原の欧米系島民の混合言語、ロング他（2010）では石垣島の台湾人コミュニティの、ロング（2011）は伊賀上野地域の多言語コミュニティの言語使用状況に関してそれぞれ研究を行っている。

このように最近になり、様々なコミュニティの言語使用に関しての研究が進んできているが、未だにスポットライトが当てられていない外国人コミュニティも数多く存在する。増加する外国人とのコミュニケーションを考える上で、外国人コミュニティの言語使用についてさらなる記述が望まれる。管見の限り、これまで在日ドイツ人コミュニティの言語使用に関しての研究は皆無である。本稿では、神奈川県にある東京横浜独逸学園というドイツ人学校の生徒二人の言語使用を記述する[1]。まず彼らの言語使用の社会言語学的背景を記述した上で、聞き取り調査によって得られた言語使用の特徴を記述する。そして、二者間で使用される「混合スタイル」の特徴を記述する。最後に、その他の在日外国人コミュニティとの比較をすることによって、彼らの言語使用の特徴を浮き彫りにする。

２．調査対象

２．１．横浜独逸学園(Deutsche Schule Tokyo Yokohama)の概要

東京横浜独逸学園(Deutsche Schule Tokyo Yokohama, 以下 DSTY)は 1904 年に開校した 100 年以上の歴史を持つドイツ人学校である。教育は幼稚園から高校まで行われ、現在約 500 名の生徒が在籍する。基本的なカリキュラムもドイツのチューリンゲン州のものに従っていて、授業は全てドイツ語で行われる。しかし生徒の多様な言語背景

[1] 厳密な意味でのドイツ人コミュニティができているかは不明であるが、多くの似た背景を持つ生徒が同じ学校に通うこと自体で、そこにある種のコミュニティが存在すると言ってよいだろう。

に考慮して、日本での小学校 2 年生から 4 年生まで、日本語を母語とする生徒に対してのドイツ語教育、ドイツ語を母語とする生徒に対しての日本語教育が行われる[2]。その後の教育では、生徒の言語習得背景に応じて、第二外国語としての日本語（第一は英語）、母国語としての日本語の授業を取ることができる。2010 年時の在籍生徒の国籍と数は以下の表 1、表 2 のとおりである。

表 1. 在籍生徒の国籍 [3]

(Deutsche Schule Tokyo Yokohama 2010:178)

国籍	数
ドイツ	203
ドイツ／日本	179
日本	28
スイス／日本	28
ドイツ／その他	27
スイス	11
オーストリア／日本	8
オーストリア	7
その他	13

表 2. 在籍生徒の在籍校別割り当て

(Deutsche Schule Tokyo Yokohama 2010:178)

在籍校	数
Kindergarten（幼稚園）	89
Grundschule（小中学校）	149
Gymnasium（高校）	241
計	479

在籍生徒は、幼稚園からずっと独逸学園に通う生徒、ドイツから日本に一時的な滞在である生徒、日本の公立学校から途中で転校してくる生徒など様々である。幼稚園の生徒はドイツ語能力がばらつくが、小学校以降の生徒はドイツ語での教科学習が始まるため、ドイツ語能力が一定以上であることが推測される。また、日本語能力については、個々の親の使用言語や日本の学校での学習経験など、様々な要因によって個人差があると思われる。

２．２．インフォーマント

本稿はケーススタディーとして、調査当時 DSTY に所属している、二人のドイツ人

---

[2] 東京横浜独逸学園のホームページ上のパンフレットを参照した。
（http://www.dsty.ac.jp/sites/default/files/content/file/broschuere.pdf）

[3] 国籍別と在籍校別で累計生徒数が違うが、おそらく統計の年度が違うのだと思われる。また、表中の「／」は二重国籍を示す。

兄弟、JとLに対して面接調査と録音調査を行った。録音調査は2010年の2月から3月にわたり行い、Lに録音機を渡し、同じ寮に住むJと会話がありそうな時に録音をするようにお願いした。会話は神奈川県の寮での会話と、愛知県の実家での会話である。同時期に言語意識の面接調査を行い、その後も随時聞き取りを行った。JとLは両親が共に宣教師として来日しているドイツ人であり、日本語が堪能である。JとLの居住歴と学歴は以下の通りである。

表3. 被験者の居住歴及び学歴[4]

J（1990年12月20日生）			L（1993年1月5日生）		
年齢	居住地	学校	年齢	居住地	学校
0-2	愛知県	／	0	愛知県	／
2-3	ドイツ	／	0-1	ドイツ	／
3-5	愛知県	公立の幼稚園	1-6	愛知県	公立の幼稚園
6-7	愛知県	公立小学校			
7-8	愛知県	生徒が三人のドイツ人のみの学校			
8-9	ドイツ	公立学校	6-7	ドイツ	公立学校
10-12	愛知県	生徒がLと二人のみのドイツ人学校	8-10	愛知県	生徒がJと二人のみのドイツ人学校
12-14	愛知県	ドイツの通信教育	10-12	愛知県	ドイツの通信教育
14	ドイツ (4ヶ月)	公立学校（2ヶ月）	12	ドイツ (4ヶ月)	公立学校（2ヶ月）
14-16	愛知県	日本の私立中学校＋ドイツ語の通信教育	12-15	愛知県	日本の私立中学校＋ドイツ語の通信教育
16	ドイツ (4ヶ月)	公立学校（2ヶ月）	15	ドイツ (4ヶ月)	公立学校（2ヶ月）
17-19	神奈川県	DSTY	16-17	神奈川県	DSTY

表3のように、様々な学校に通うものの愛知県での滞在が長い。そこでの親を含めたドイツ人の宣教師コミュニティの存在が、彼らの言語使用に大きく影響を与えた社会

[4] 本人たちの記憶があいまいな部分もあり、各時期の滞在、通学期間の詳細の情報は得られなかった。

言語学的要因であるようである。DSTY では、母国語としての日本語の授業を受けているが、簡単だと感じているようである。つまり、DSTY の生徒の中では日本語能力が高いと見える。J と L は DSTY での学習期間が短いが、このような場合も多様な背景を持つ独逸学園の生徒の実態の一端を表すものであると考える。

３．言語使用の特徴

本節では彼らの、ドイツ語、日本語、混合スタイルの言語状況を概観し、ドイツ語と日本語の使用にどのような特徴が見られるかを言語意識から記述していく。

３．１．日常語（vernacular）としての二言語混合スタイル

L と J は日本語、ドイツ語共に言語能力が高く、両言語を生活で使用している。学校での授業中はドイツ語のみの使用であり、教師との会話もすべてドイツ語である。両親との会話は主にはドイツ語を使用するが、日本語も使用する。授業が終わればクラスメートと日本語・ドイツ語を使い、日本人と話すときはもちろん日本語のみを話す。また、普段の生活での使用言語はドイツ語より日本語の方を使い、インターネットのニュースを見るときなどもほとんど日本語のものを見ると言う。

J と L はドイツ語と日本語の高度な能力を持っているが[5]、vernacular（日常語）は二言語混合スタイル[6]である。これまで、同一談話内でのコードスイッチング（以下 CS）も、デフォルトとして一言語使用があり、ある特殊な場合に CS が起こると捉えられている傾向があるが、J と L の場合はむしろデフォルトとして、混合スタイルがあると考えられる。J と L の間の会話は全て混合スタイルが使用されているが、二人ともそれが彼らにとって一番自然なスタイルであると認識している。それを示すエピソードとして、L がドイツから来たばかりの日本語のわからない新入生に対して、無意識的にずっと日本語を使っていたことを述べている。また、L は子供の時はいくつかの単語がドイツ語か日本語かわからなかったことがあったと述べている。このことから、二言語混合スタイルが生得的なものであるということも推測できる。純粋な日本語とドイツ語は、J と L にとって地方の方言話者にとっての標準語のような、後に習得された標準スタイルなのである。混合スタイルについては 4 節で詳しく述べる。

---

[5] L と J は日本の学校と DSTY の学習の両方で言語的な問題を感じたことがない。

[6] Long（2007）、ロング（2009）で言われるような混合言語とは異なる概念である。二人の会話は言語と呼べるまではいかないが、規則性があり、最も慣れた vernacular style であることから、本稿ではこのように呼ぶ。L の話では、DSTY の生徒も同じように日本語とドイツ語を混ぜて使うが、自身が一番「ひどい」、つまり混合が著しいと述べている。

３．２．独自の社会言語学的規範

Ｊと Ｌのドイツ語と日本語は、文法的には一般的な母語話者とほとんど変わらないが、社会言語学的規範は異なるようである。

まず L の敬語行動について、筆者はある時 L が自分より 20 歳ほど年上の初対面の相手に日本語で話していて、丁寧体を全く使っていない様子を観察した。理由を尋ねると、「外人だから許されると思ってるから」と述べている。外国人としての扱いから厳密な敬語使用が要求されないために、L には特殊な規範が形成されていると考えられる。オストハイダ（1998）が明らかにしたように、日本人は外国人の言語能力に対して外見により異なるステレオタイプを持っていて、それぞれ違った言語行動を見せる。西洋人的な外見は日本人のステレオタイプ的な「外人」であり、日本人は彼らが日本語を話せないと判断する。そのため、彼らに対して日本人と同じような敬語使用を求めない傾向があるのである。

さらにドイツ語の敬語使用も通常のドイツ人とは異なるようである。L は「授業で先生に対して質問をするとき aber du hast geasagt dass,（でも、きみはこう言っていたよ）･･･といって皆に笑われてしまった。」というエピソードを話している。ドイツ語には、二人称代名詞に敬称と非敬称（Sie と du）がある。必ず敬称（Sie）を使わなければならない相手である先生に対し、非敬称（du）を無意識に使用してしまったのである[7]。敬称 (Sie)をドイツ語で使用する機会が少ない上、敬語をあまり使わなくてもいいという日本語での敬語使用規範から間違えを犯してしまったのである。同じ在日外国人学校である韓国人学校生徒の敬語使用は日本語と韓国語で、ともに中間的であるようだが（朴 2006）、J と L は外見が白人であることで、ドイツ語とも日本語とも異なる敬語使用の規範を形成しているのである。

また、J と L は自身の言語使用の社会言語的な側面に関して、ドイツ人とは異なるということを認識している。J はドイツに行ったとき、「なぜみんなこんなに物事をストレートに言うんだろう」と驚いたと述べている。L は卒業文集 (Deutsche Schule Tokyo Yokohama 2011)に、前は自分がドイツ人だと思っていたが、今はよくわからないと書いている。これは決して民族的なことではなく、言語によって規定されるものである。日本社会でドイツ語と日本語を話して育ったことによって、ドイツ社会でドイツ語を話して育つ場合と異なる社会言語学的規範が形成され、純粋なドイツ人との違いを言

[7] 先生に対しては、通常いくら親しくなっていたとしても du は使用されない。また、一過性のミステイクとしても見られるが、通常の母語話者であれば、すぐに訂正するはずのミステイクである。

語によって感じているのである。

４．二言語混合スタイルの構造

これまでドイツ語と日本語使用の特徴に関して考察したが、本節ではＬとＪの間で使用される二言語混合スタイルの構造及び機能を考察する。Ｌ とＪの間で使用される言語は上述のように二言語混合スタイルであり、混合スタイルが vernacular (日常語) になっている。その混合スタイルの特徴は以下のようにまとめられ、ある程度の規則性が見られる。

a) 基盤言語（Matrix Language）と埋め込み言語（Embedded Language）[8]は頻繁に入れ替わる
b) 片方の言語の語彙がもう一方の言語の対応形式より使用頻度が高い場合は、挿入 CS が起こる
c) 音節数のより少ない語彙が選択される場合がある
d) 感動詞やフィラーは日本語が使用される
e) 会話ストラテジーとしての CS も見られる
f) 両言語の統語構造の崩壊は起こらないが、文内で CS が見られる場合に特殊な統語構造が見られる

以下小節で、それらの特徴を録音会話における実例を交え考察していく。なお実例の文字化は日本語部分を筆者が行った後、Ｌにドイツ語部分の文字化をお願いした。

４．１．基盤言語 (Matrix Language)の選択

Ｌ とＪの混合スタイルにおいて、片方の言語が基盤言語（Matrix Language 以下 ML）になり、もう一方の言語が埋め込み言語（Embedded Language 以下 EL）になるのではなく、ML と EL は絶えず入れ替わる。[9]

（1）Ｌ：ノイズカットつけて
　　Ｊ：なんで俺の部屋にいるの？
　　Ｌ：だって、drüben ist niemand. Ich will ja nur gucken, wie gut die Qualität ist. Ich glaube ich lösch diese Sachen. だってこんなの載っててもしょうがないもん (だって、あっちに誰もいない。ただどれくらいクオリティーがいいか確かめたいだけ。これは消すと思う。だってこんなの載って…)

[8] Myers-Scotton(2002)の概念
[9] 以下例文の括弧内の日本語訳は意訳であり、全て筆者が行った。

J：ふん、何が？

L：Solche くだらない会話。（こんなくだらない会話）

J：ああ、え was willst du stattdessen machen? （え、じゃあ何がしたいの？）

例 1 では、L がまず日本語で発話をする。それに対して J は日本語で質問をする。L は主にドイツ語で応対する。J はさらに日本語で質問をし、L はドイツ語と日本語の混合名詞句で答える。そして J は主にドイツ語で質問をするという流れである。一連の会話でドイツ語と日本語のどちらもが基盤言語として使われているのである。この言語選択に規則性があるかどうかは興味深いが、具体的な選択条件は様々な要因が絡み解釈が難しい。

４．２．語彙挿入 CS の規則性

基盤言語が決まるとその中に語彙レベルの挿入が入る場合がある。その規則はまず、基礎語彙でないものは片方の言語でのみ学習したものや、別の言語より頻繁に使うものが挿入される。

(2) J：Relativitätstheorie と Röntgen あたりほとんどやっていない、やば、みたいな。
（相対性理論とレントゲンあたりほとんどやってない。）

(3) J：Weil, das ist ちょっと langsamer als クロール、
（だってそれ［バタフライ］はクロールよりちょっと遅い。）

例 2 は学校のテスト勉強の話で、学習範囲の単語がドイツ語になっている。二つの単語はドイツ語で学習したため、わざわざ日本語にするのは非効率的なのである。逆に例 3 は、クロールが日本語になっている。クロールは日本の公立学校や私立学校に在学中に覚えた単語である。そのため同じ単語をドイツ語で後に習っていても、ドイツ語でなく、先に覚えた日本語を使用する。このように、片方の言語での語彙が記憶上優勢である場合、借用、または挿入という形で CS をするようである。

また、ターン交替時に見られる感動詞や反応は全て日本語である。

(4) L：うん、え、でも、die runter geladene Version stürzt doch auch ab, oder?
（でも、そっちの充電バージョンもクラッシュするんじゃないの？）

J：あーそやね。Äh ne vielleicht ist das ja das Problem von dem コネクター。
（そやね、あ、違う、多分それコネクターの問題だよ）

L：まあね。Hardware Problem ist so sau Kacke
（まあね、ハードウェアの問題はほんとにくそだよ）

J：だって so lang man, umm, nicht das Teil anschließt, stürzt das ja nicht ab.

（だって長いことそれつないでなかったら、クラッシュしないもん）

（5）J：Ich konnte nicht mehr normal ähm なんだっけ、Rückenschwimmen.

（もう普通のあれができなかった、なんだっけ、背泳ぎ。）

例 4 では、基本的な内容を伝える文はドイツ語であるが、ターン交替時の応答表現や、接続表現などは全て日本語になっている。「ああ」「まじで？」「いや」「うん」「は？」などは使われ、ドイツ語の ‘Ja’ ‘nein’ ‘ne’ ‘echt?’ などは使用されない。録音した会話内では L と J の会話では終始ドイツ語の応答表現は使われていなかった。同様に、例 5 のようにフィラーが日本語になることも見られる。[10]

さらに、単語の長さも CS に関係する可能性がある。

（3）J：Weil, das ist ちょっと langsamer als クロール。

（だってそれ［バタフライ］はクロールよりちょっと遅い。）

例 3 ではドイツ語の “ein bisschen” が使われず、日本語の「ちょっと」が使用されている。J は「こっちのほうが言いやすい」と述べているが、単語の長さがかかわっている可能性がある。ein bisschen は 3 音節であるのに対し、「ちょっと」は 2 音節であり、音節数が「ちょっと」の方が短い。しかし、音節数がどこまで影響するかは CS の実例が少ないため本稿では検証することができない。

４．３．会話ストラテジーとしてのコードスイッチング

J と L の混合スタイルには、発話の効率性による CS の他に、会話ストラテジーとしての CS も多く見られる。まずそのようなものに、会話の中である部分に相手の注意をひきつけるために CS を行っている場合がある。

（6）J：Das ist so ありえない。（これはほんとにありえない）

（7）J：まあ、でもどんだけ Zufall なんだよみたいな。（どんだけ突然なんだよみたたいな）

（8 ）J：ふん、何が？

L：Solche くだらない会話。（こんなくだらない会話）

まず例文（6）（7）（8）では、基礎語彙と考えられる単語が一つ切り換えられている。それぞれ切り替えられている単語は基盤言語に同一の形式（“Umglaublich”「ありえない」，「突然」“ Zufall”、「こんな」“Solche”）があるため、切り替えによって発話の効率性は上がらない。ここでは効率性ではなく、談話を調整するためのストラテジーと

[10] Auer（2007） によると、このような感動詞やフィラーの切り替えはバイリンガルの間でよく観察されるようである。

して CS が利用されている。通常の CS をしない場合では語気を強めるような箇所で CS をすることにより、相手の注意をその箇所に向けることを可能にしているのである。さらに、もう一つの会話ストラテジーとして引用に CS が利用される。[11]

(9) J : Hab ich so Julie gefragt あーちょっとスモークマシンってためせる？ und der meinte dann うんいいよ。Da sind wir reingegangen, haben alles dunkel gemacht, und dann スモークマシン angemacht, （ユリーに「あーちょっとスモークマシンってためせる？」って聞いたら、彼女が「うんいいよ 」って言ったのね。それで中に入って、すべて真っ暗にしてスモークマシンつけてみた）

(10) J : Die meinte so,いままでダメって言われたことも、最近はオッケーになってきたから、もしかしたらスモークもいいかも。Und vielleicht können wir das ja in Dings benutzen.（彼女が「いままでダメって言われたことも、最近はオッケーになってきたから、もしかしてスモークいいかも」っていう風に言ってた。それでたぶん使えるようになってると思う）

例 9、10 では、会話内で第三者の発言を引用するところで、引用部分がすべて日本語になっている。これは必ずしも実際の会話で日本語を使っていたことを示すものではないが、CS がストラテジーとして利用されるのである。もし、そのままドイツ語で間接話法にすると、代名詞の一致や動詞の位置や活用変化を考える必要が出てくる。また、そのままドイツ語で直接話法にしても、引用部分がわかりにくくなる。そのため、CS は、引用を明確にするとともに、産出を容易にするためのストラテジーとして利用されるのである。

４．４．混合スタイル独自の構造

ここまで、L と J の二言語混合スタイルには、発話の効率性のための、また会話ストラテジーとしての CS が見られることを述べた。本節では、彼らの混合スタイルに独自の文法構造があることを述べる。まず、J と L の文の混合スタイルの統語構造は通常、基盤言語（ML）の統語規則に従うが、CS が起こる文には、埋め込み言語（EL）の統語規則に従うものが見られる。

(11) L : Als wir international Party gemacht haben, ich bin so, お金両替 machen gegangen.
（インターナショナルパーティーやったとき、おれあの、お金両替しに行ったの。）

例 11 では、L は「お金両替 machen gegangen」と発話している。ドイツ語で

[11] ナカミズ（2003）も述べるように、このような引用の CS も、バイリンガルの間でよくみられるようである。

‘Geldwechsel gegangen’は言えるが、‘Geldwechsel machen gegangen’は言えない。つまり、ここでは、ドイツ語の統語構造ではなく、日本語の「お金両替しに行った」という統語構造に従っている。通常の文内 CS をしない発話では、このような片方の言語の統語構造が別の言語の統語構造に影響する現象は見られない。発話をする時点では「お金両替しに行った」という概念構造を表現しようとしたが、ドイツ語では同じ統語構造を使用することができないという規範が働く。文法的な違反を回避するために一部に日本語を使用するのである。

さらに、日本語で始まる複文にドイツ語の複文構造が使用される例が見られた。

（12）J：いやそこまでいかないか、wenn der halt zufällig so Stellen wählt, ne（そこまではいかないか、とにかく偶然その箇所を選べばね）

L：うん

（13）L：どれくらい聞こえるんだろ、wenn man das hier einfach hinlegt（もしここに単純においたらどれくらい聞こえるんだろう）

J：知らん。

日本語では複文は必ず従属節－主節、つまり従属節から主節に続く構造であり、主節－従属節という構造にはならない。もちろん倒置としてそのような構造ができるが、多くの場合で据わりの悪い文になる。ドイツ語では両方の複文構造が可能であるが、例 12、13 の日本語の部分のような独り言の文が存在しない。そのため、主節にドイツ語では表現できない日本語の文が来て、従属節にドイツ語が加わり、ドイツ語の複文の統語構造が採用されている。結果的にドイツ語にも日本語にもなしえない複文構造が形成されている。

このような複文が生成される理由には前小節で述べた、会話ストラテジーの一つとしての利用があると考えられる。つまり、発話の方向を調整していると考えられる。日本語で独り言を述べた後に、その詳細をドイツ語の従属節でつなげて詳細な説明を追加することによって、独り言がより相手に説明的になり、発話の方向を自分から相手に転換することができる。例 13 では、相手の答えを要求しない「どれくらい聞こえるんだろ」という自問の文の後に、相手の反応を求めた結果として、特殊な複文構造が形成されたと考えられる。

４．５．混合スタイルからドイツ語への影響

CS が起こる文の特殊な統語構造に加えて、相互の影響として、両言語で形式と機能が類似する「ne」の過剰使用が見られた。ドイツ語には、付加疑問文または、日本語

の終助詞「ね」のような軽い意味の機能を持つ ne が存在する。彼らの二言語混合スタイルでは、ne の使用のみが見られ、その他の似た機能を持つ文末表現は使われない。

（14）L：das wär' geil ne（それすごいだろうね）

（15）J：先週金曜日俺は入れんって言われた。人が十分おるから. Ok ich mein, ich habs auch fast, zu spät abgegeben ne.（まあ俺も提出したのが遅すぎたんだろうね）

（16）L：あそっか Du hast ja morgen nur Physik ne?（明日、物理しかないんだったよね？）

その他似たような機能を持つ、nicht wahr や Ja などが使用されないのに対し、ne のみが使用されるのは、日本語に同等の機能と形を持つ「ね」が存在するためである[12]。本人たちも「ne の使用が多い」、また「おかしい」ということはドイツで指摘されたことがあると述べている。現時点で筆者の感覚では、彼らの使用する ne が標準ドイツ語の ne とどの様に異なるかは判断できないが、今後検証する必要がある。[13]

５．他多言語コミュニティとの比較

ここまでケーススタディとして、DSTY の生徒二人 L と J の言語使用に関して記述を行ってきた。それらをまとめると以下のような特徴が見られた。

a) 両言語の高い能力を持っている。対話相手により混合スタイルと日本語、ドイツ語を使い分けるが、混合スタイルが vernacular（日常語）である

b) 両言語の文法規範はほぼ母語話者と変わらないが、社会言語学的規範は独自のものを持つ

c) 二言語混合スタイルには、ある程度混合の規則が見られる。

d) CS は談話的機能を持つ場合がある

e) 混合スタイルの文法構造は、一見両言語の規範に反することはないが、相互の影響が見られるものも存在する

以上のような特徴は、J と L が複数の異なるコミュニティに所属したことが大きな社会言語学的要因になり、形成されたと考えられる。

---

[12] J と L には、筆者の解釈と同じように、日本語からの影響という意識があった。また、L は親からの影響もあるのではないかと述べていた。

[13] L に文字化をしていただいた際に、ne は全てアルファベット字表記になっていたが、本人に日本語かドイツ語か明確な意識がないようであった。

表 4.　J と L の言語規範形成

コミュニティの種類	J と L の所属	言語規範形成
バイリンガルコミュニティ	宣教師コミュニティ	／
日本人コミュニティ	日本の公立・私立学校	日本語規範
ドイツ人コミュニティ	DSTY	ドイツ語規範

J と L はまずバイリンガルコミュニティである宣教師コミュニティに所属し、混合スタイルを含む独自の言語規範を形成した。その後、日本人コミュニティとして捉えられる日本の公立学校で日本語の母語話者規範を形成する。そしてドイツ人コミュニティである DSTY でドイツ語の母語話者規範を形成する。[14]そのため、一部、混合スタイルには相互の統語構造の影響が見られるが、Long (2007) や金（2003）に見られるような、片方の言語の統語構造がもう一方の言語に大きく影響する例は見られない。例えば Long (2007:188）の戦前生まれの欧米系島民が「何をしたらいいかわからない」からの統語構造の影響から “what I should do , I don’t know”と言う発話が見られているし、金（2003）では、在日コリアン 1 世が朝鮮語の統語構造からの影響で「済州道でお金決めしてきたわけや」という発話が見られている。

しかし、J と L のドイツ語、日本語には各言語で「非規範的（もしくは誤用）」である表現が使用されることはない。J と L は日本の公立学校と、ドイツ人学校の両方に通い、日本語とドイツ語の文法的規範意識を高度に発達させたため、統語構造の崩壊が起こらないのである。逆に、一種類のみのコミュニティに所属すれば、両言語の規範は崩れ、前述の Long (2007)のような発話が起こる可能性もある。DSTY での学習が長い生徒は逆に日本語の規範を形成する機会が少なく、日本語の統語構造の崩壊が起きている可能性がある。

６．まとめと今後の課題

本稿では、在日ドイツ人学校生徒 J と L の言語使用の実態を言語意識から記述し、混合スタイルの体系を明らかにし、その社会言語学的な背景について考察した。

しかし、いくつかの課題は残る。J と L の言語形成には幼い頃の宣教師コミュニティの間での言語が強く影響しているため、他の DSTY の生徒の言語使用とは異なる可能性がある。前述のように DSTY の学生は多様であるため、一般化はしにくいが、DSTY で長期間学習している生徒の言語使用も今後明らかにしていく必要がある。

[14] むろん、宣教師コミュニティ内でもある程度のドイツ語、日本語の規範を形成しているが、母語話者の言語規範は別のそれぞれのコミュニティ内でのみ形成されると考えられる。

また、J と L の混合スタイルについて明らかにできなかった部分も残る。その一つに形態素レベルの CS がある。例として、お金の単位「万」にドイツ語の複数形マーカーを付けた「fünf Männer (5 万円)[15]」の使用が一例確認された。また、L は日本語の「がんばる」にドイツ語の過去の形態素 ten を付けた「がんば tten（頑張った）」を使用すると述べていた。その様な用例をさらに収集して、J と L の混合スタイルについてより詳細な考察をしていく必要もある。

謝辞

本稿は第一言語としてのバイリンガリズム研究会第 2 回研究会で発表した内容を、大幅に加筆修正したものである。研究会の山本雅代先生、難波和彦先生、田浦秀幸先生をはじめコメントを下さった皆様、個人的にご指摘を下さったペート・バックハウス先生、また調査に協力してくださったインフォーマントの J と L、DSTY の先生方に感謝を申し上げる。

参考文献

オストハイダ・テーヤ（1998）「対外国人言語行動と言語外的条件の相互関係」『大阪大学日本学報』18：89-104 大阪大学

金美善（2003）「混じりあう言語—在日コリアン一世の混用コードについて—」『月刊言語』32-6：46-52 大修館書店

ナカミズ・エレン（2003）「コード切り替えを引き起こすのは何か」『月刊言語』32-6：53-61 大修館書店

朴良順（2006）『滞日韓国人中高生に見られる中間言語』東京都立大学博士論文

吉田さち（2004）「在日コリアン高校生の二言語併用—来日時期とコードスイッチングの相関を中心として—」『第 11 回社会言語科学会発表予稿集』48-51

ロング・ダニエル（2009）「小笠原混合言語はどうして言語と呼べるか？」関西言語学会第 34 回大会発表資料

ロング・ダニエル（2011）「伊賀上野の外国人住民コミュニティの言語生活環境—参与観察調査からの中間報告—」『人文学報』443:1-19 首都大学東京

---

15 ドイツ語の複数形の派生形態は単語によって異なるが、Man（人）は Männer（人々）と派生する。「万」の複数形も Man（人）に従って生成している。このような「万」はお金の単位のみに対して使用されるため、単位を含んだ「万円」として使用される。「～万人」などには使用されないようである。

ロング・ダニエル・張守祥・張愛慶・石坂真央・今村圭介・田中節子・塚原佑紀（2010）「石垣島の台湾系島民の日本語— 1 話者のケーススタディー—」『日本語研究』30：31-50 首都大学東京

Auer, P (2007) “The pragmatics of code-switching: a sequential approach”, in Li, W(ed) *the bilingualism reader*, 123-138, London and NewYork, Routledge

Deutsche Shule Tokyo Yokohama (2010) *56 Jahresbericht 2010* ,

Deutsche Shule Tokyo Yokohama (2011)*abifurai アビフライ die letzte 13.*

Long,D (2007） *English on the Bonin (Ogasawara) Islands*, Duke University Press

Myers-Scotton, C. (2002). *Contact linguistics.* Oxford: Oxford University Press.

（いまむら　けいすけ・首都大学東京大学院博士後期課程）